

た色柄もの、高級タオルを得意としている。泉州タオルは、後晒タオルで、白の浴巾といった相場ものが中心である。

今治タオルは、生産量、出荷額において、すでに低成長期に入っている。これに対し、近年タオルのアパレル化が進んでいるが、現状は厳しい。輸出入も、発展途上国、中進国の追いあげにより、今後の対策が必要である。今治地域のタオル工場は、工業地域を形成することなく、市街地、住宅地、造船地域、農村地域にまで、広く分布している。

今治地域におけるタオル産業の地域への影響について

①造船業との関わり

今治地域の造船業は、近年、頭打ちの状況にあり、工場も、中心が他の地域へ移転している。タオル産業と造船業は、バランスを保ち、地域経済を支えている。造船地域にも、タオル工場が立地しており、造船業からタオル産業への、転業の例もある。また、家庭内で、夫が造船業、妻がタオル産業、という例もある。

②農業との関わり

今治地域では、農村地域にタオル工場が多く分布している。これは、タオル工場の従業員だった人が、新しく工場をもつ時、土地の広くて安い農村地域を選ぶ場合、市街地に工場をもっていた人

が、公害その他の理由で、農村地域に工場を移転する場合、農家の二男、三男が、新しくタオル工場をはじめるとある。

農家の兼業としてのタオルの製織は、現在、今治地域では行われていないが、関連部門である燃糸工程では、農家の兼業が多い。

③分業のしくみ

タオルの製造工程は、細かく分業化されており、それぞれの専門の業者が、これを分担している。燃糸、染晒、紋紙からパッケージに至るまで、極めて多くの企業、人々が、タオル産業に関わっている。

④流通のしくみ

タオル産業は、流通業との関わりが強い。流通チャンネルは、1つめは、タオル専門問屋、2つめは、30年代以降タオルケットの影響で、寝具商、3つめは、50年代になって、ブティック、お土産屋などである。地理的側面では、大阪、東京、名古屋の順に、結びつきが強い。

以上のように、今治地域では、タオル産業と地域が、非常に密接に関連している。タオル産業の基盤が、地域にしっかりと網の目のようにはりめぐらされており、タオルは、その網の目を往来することにより、造りあげられるのである。

福島市の温泉地における都市化の影響

鈴木 純子

長期休暇に調査が行いやすく、また興味も持っていたので、私は卒業論文では出身地の福島市の温泉地を扱うことにした。福島市内の温泉地としては10余あるが代表的なものは飯坂・十湯・高湯である。これらの温泉地の性格を、都市化の影響がどのように現れているかを主にして多角的に分析することを目的とした。

市内で最多の入込数があり、しかも古い歴史を持つ飯坂温泉は、歓楽街的性格が非常に強い。土湯温泉は山間部の保養地型温泉である。高湯温泉も山間部にあるが、ドライブやスキー等の基地としての性格と療養型温泉としての性格を合わせ

持っている。近年の入込状況はそれぞれの温泉地で傾向を異にしている。土湯温泉は増加、飯坂は減少・横這い、高湯は減少を示している。同じ市内にありながらもこのような相違が生じる要因はいくつか考えられる。第一に市内の温泉地に大きな影響力を持つ磐梯吾妻スカイラインの存在である。スカイラインの入込数が激減しているが、最も相関の高い高湯温泉がそのダメージを直接的に受けたわけである。第二に、現在温泉ブームといわれているが、中でも土湯のような保養地型の温泉地が好まれているのではないかと思われることである。逆に言えば、飯坂のような歓楽的な温泉

はあまり望まれなくなったのだろう。第三に、市内の温泉地間の力関係が変化した可能性があることである。土湯温泉の観光客の吸引力が強くなり、市内の他の温泉地に対する競争力が増したと考えられる。

さて、各温泉地は、第二次大戦後福島市に吸収合併された。交通網も発達し、福島市は関東からの日帰り圏に入った。飯坂温泉は福島市の温泉の中で最も都市化の影響を受けており、福島市の中心市街地から電車・自動車で約20分の位置にある。中心市街地から飯坂温泉街まで延びる私鉄飯坂線沿線は宅地開発が進んでいるが、特に飯坂町平野の住宅地造成は著しい。飯坂町は市の中心市街地の衛星都市的性格を持つ。衛星都市といっても、観光・果樹栽培など独自の産業があるので、中心市街地に従属的な性質のものではないが、通

勤都市的な性格は次第に強まっている事も確かである。土湯温泉は、中心市街地から車で40分ほど離れた山間高地に位置する。土湯温泉のある土湯温泉町は、その住民ほとんどが温泉観光にたずさわっている温泉観光町である。都市化の及ぶ影響の一つとして周辺村落の変容ということが挙げられるが、土湯温泉町の場合も、戦後過疎化が進み、また戦前農業も行われていたが戦後はほとんどなくなりほぼ純粋な温泉観光町といえる。福島市の温泉地の中では土湯温泉が一番温泉地らしい温泉地といえよう。

以上のように、それぞれ独自の特色を持つ福島市の温泉地であるが、これからどのように変化していくのか、特に60年3月の東北新幹線土野始発の影響がどの程度あらわれるのかなど注目していきたい。

都市河川の機能に関する考察

—東京東部を例として—

高橋三佳

1. 研究の目的

東京東部地域において河川に対して関心が集まりつつある。その背景にある居住環境の社会的選好意識の変遷を明らかにし、都市河川の機能を様々な角度から検討することで今後期待される河川像の可能性を検討することを目的としている。

2. 研究の方法

環境研究の一環としての本論文の位置を示すために序論において居住環境の研究史について述べる。フィールドを概観し、河川がフィールドにおいて歴史的に果たした役割を文献や資料から述べる。

河川の機能を分類に従ってそれぞれについて東京東部地域を流れる河川を例にして実証する。最後に東京東部地域内の河川のみでなく望ましい河川像の形成に成功している例をあげ、行政側の対応方針と今後の展望について述べる。

3. 研究の結果

東京東部地域はきわめて平坦な沖積低地であり河川が縦横に走っている。その中でも荒川下流流

域である足立区・葛飾区・江戸川区・北区・荒川区・台東区・墨田区・江東区の8区にフィールドを限定した。フィールドを概観した結果、低湿な自然条件も低層過密な住工あるいは住商併用建物に代表される人文条件も大体共通していることがわかった。

この地域では河川の流路変遷と都市域の発展には深いつながりがあり、地形が平坦な事もあって河川は格好のランドマークとなり人々の心に大きな位置をしめてきた。

河川に対して以前は治水機能、利水機能が中心的に求められてきたが、環境に対して多様な要求を人々が持つようになった最近では、河川および河川敷は数少ないオープンスペースとしてその要求の充足の一翼をになうことを期待され、環境機能に重点が移ってきている。

環境機能には3つある。第一の自然保全機能からは微気候の調整について観測することで実証することとした。観測の結果、夏期において河川が相対的冷源として働いていることがわかった。第二の空間機能については、オープンスペースとして働いていることを確かめ、経済的理由等からこ